

村発信の特異な在郷軍人分会誌 戦場と交換した『真友』の発見と分析

藤井忠俊

The Peculiarity of SHINYU—Reservists' Association Local Chapter Newsletter Issued by the Village: A Study of Newly Discovered Correspondence between Men in Battlefront and SHINYU

- ①はじめに
- ②地方改良運動と『真友』の創刊
- ③在郷軍人会藤根村分会の成立と課題
- ④青訓から「満州事変」へ
- ⑤日中戦争の戦場と銃後
- ⑥慰問の役割と動員情報
- ⑦おわりに

[論文構成]

戦場から村に送られた兵士の軍事郵便と村から戦場の兵士に送られた通信の交信実態と相関関係をみると、本稿はその問題意識をもつて村から送られた

郷土通信『真友』(原字は『眞友』)の解析を試みたものである。

岩手県旧藤根村高橋家に保存されていた七〇〇〇通の軍事郵便の存在を前提として、本研究における共同調査の狙いの第一は、村から定期的に送られていた『真友』の探索にあつた。運よく、私たちはいままで数部しか存在の知られていないかった『真友』三七年間の全号を発見することができた。

『真友』の創刊は一九〇八(明治四二)年、真友会をつくった青年グループによる啓発誌であったが、明治末年ごろからは帝国在郷軍人会藤根村分会の会誌になる。以後、アジア太平洋戦争まで、平時戦時を通じて刊行しつづけた。分会誌とはいえるが、『真友』はその代替物になった側面がある。

本稿は『眞友』の性格を村と在郷軍人会の「一面の関わりから分析するとともに、読者になつた青少年、軍隊入隊者、分会員、出征兵士との関係をとりあげた。それは以下のような問題をもつていて。第一は創刊にかかる明治末期の地方改良運動について(第一章)。第二は在郷軍人会の指導がどうあらわれたかの側面について(第二章)。第三は誌面が村の青少年の動向をどのように反映したかについて(第三章)。第四は戦時における銃後農村の形成過程について(第四章)。第五は村と戦地の通信の双方性の確保について(以上第四・五章)。そして、何を伝えたいのか、何が知りたいのかを『眞友』と戦地からのたよりの交信のなかから具体的に検証してみた。

『眞友』は在郷軍人会誌だから兵事に偏るのは当然としても、他のそれとくらべると極めて郷土色がつよい。この時期、全国的には村が発行した村報、時報などがあるが、『眞友』はその代替物になった側面がある。